

氏名	岡田 摩理 (おかだ まり)	
学位の種類	博士(看護学)	
学位授与番号	甲 第 10 号	
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 7 日	
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項該当	
学位論文題名	小児看護学実習において学生が臨床判断の思考を深めていくプロセス (The Process of Nursing Students' Developing Thinking on Clinical Judgment in Pediatric Nursing Practicum)	
論文審査委員	(主) 教授	荒木 孝治
	教授	山崎 歩
	教授	泊 祐子

学位論文内容の要旨

《緒言》

看護基礎教育では、科学的な知識を活用し看護現象を論理的に統合する実践的思考の育成が重視されている。臨床場面である実習で学生が思考を深めているプロセスや思考に影響する要因を明らかにした研究は少ないため、学生が臨床判断の思考を深めていくプロセスを明らかにすることとした。

《目的》

本研究では、学生の臨床判断の思考がどのように育成されていくのかを明らかにするために、2段階の研究を行った。最初に、わが国の看護基礎教育で求められてきた看護の専門性を支える思考の内容と、それらの思考を育成してきた看護学教育の動向を文献から明らかにした(第1段階)。それを踏まえて、小児看護学実習における学生の臨床判断の思考プロセスを検討した(第2段階)。臨床判断の思考とは、対象とする子どもに必要な情報を収集し状況を査定した上で必要なアプローチを見出すための思考であり、そこに至るまでに、看護学生はどのように思考し行動しているのか、その思考には何が影響しているのかを検討した。また、分析の過程で、領域別看護学実習の経験を重ねる中で発達する臨床判断の思考があることに気づき、その発達の様相も分析した。

《方法》

第1段階では、看護基礎教育に関する政府の報告書、日本看護学教育学会誌の学術集会関連記事、看護教育に関する雑誌を対象として、看護基礎教育における思考・教育方法に関する内容を抽出した。抽出したデータを年代ごとに整理し、年代ごとの特徴を、背景を踏まえて検討した上で、特徴を示すネーミングを行った。

第2段階では、協力を得られた4年制大学において、3年次の小児看護学実習を終えた学生に個別にインタビュー調査を行った。M-GTA(修正版グラウデットセオリーアプローチ)の手法を使って分析を行い、実習中の学生の臨床判断の思考のプロセスを検討した。

《結果および結論》

第1段階の研究においては、求められてきた思考は「科学的根拠に基づく看護の必要性から広がった論理的な思考」「看護実践能力を支える基盤として求められた複合的な思考」「学士力を基盤とした専門職として看護学を発展させていく思考」の3段階に区分できた。思考の発展に伴い、教育の方法も変化しており、臨床での適切な判断力のみならず、高度な専門職の基盤となる思考が求められていた。教育方法の成果や工夫の検討と共に、学生の思考の状況を明らかにする研究が必要であることが示唆された。

第2段階の研究では4つの大学の学生26名にインタビュー調査を行った。小児看護学実習の臨床判断に視点を置いた分析では、学生は、「A:この子の身体の状態を分析的に考える」と「B:この子の個別性を文脈的に考える」ことを並行して行いながら、「C:この子として存在を身近に感じる理解ができる」ようになり、「D:この子のための判断基準で必要なアプローチを見出す」ことができるようになるという思考プロセスがあった。また、思考を推進する学生の状況と、思考を抑制する状況があった。

領域別看護学実習を重ねる中で発達する臨床判断の思考に視点を置いた分析では、「方法に沿ってやってみることで患者のための看護に気づく」ことから始まり、自己を振り返りながら、「臨床判断の拠り所となる考え方を体得する」という学生の思考の発達の様相が明らかとなった。学生は多様な思考を使って臨床判断を行い、様々な影響を受けながら、思考を発達させていくため、学生の思考プロセスの状況や影響要因を把握した上での教員の適切な指導が必要となることが示唆された。

論文審査結果の要旨

看護基礎教育において、適切な臨床理論に基づき、看護学生がケアの対象者の状況に必要なアプローチを見出す臨床判断ができるようになることは、教員にとって重要な課題である。

この課題に取り組むために、研究者は第1段階として、臨床判断の思考が、わが国の看護学教育にあってどのように育成されてきたかについて文献による検証を行った。臨床判断の思考を歴史的にたどることは、ひっきり、看護学教育において求められてきた思考方法の軌跡を追うことであり、思考の発展に伴い、教育の方法が変化し、臨床での適切な判断力のみならず、高度な専門職の基盤となる思考が求められてきたとする。この文献検討はきわめて綿密に進められており高い評価に値するものである。

研究の第2段階は、「現代の学生は実習場面の中で、どのような思考のプロセスを経て、臨床判断(対象者に適切なアプローチを見出し決定していく)を行っていくのかの解明である。研究者が研究の対象とするのは小児看護学実習(看護学部3年生配当科目)である。研究者によれば、それは研究者の専門領域であると共に、看護の対象となる子どもを学生が理解する際に、その未熟性ゆえに困難感を抱き、知識を活用した思考を必要とする領域であるからである。4つの大学の学生26名にインタビュー調査を行い、M-GTA(修正版グラウデットセオリーアプローチ)の手法で分析を行い、学生には、「A:この子の身体の状態を分析的に考える」と「B:この子の個別性を文脈的に考える」ことを並行して行いながら、「C:この子として存在を身近に感じる理解ができる」ようになり、「D:この子のための判断基準で必要なアプローチを見出す」ことができるようになるという思考プロセスがあり、同時に思考を推進する学生の状況と共に、思考を抑制する状況のあることを見出している。

また、上記のデータには領域別看護学実習を重ねる中で発達する臨床判断の思考が潜んでいるとの観点から上記とは別に分析が行われ、研究者は、学生の思考は「方法に沿ってやってみることで患者のための看護に気づく」ことから始まり、自己を振り返りつつ、「臨床判断の拠り所となる考え方を体得する」といった発達の様相に関する示唆を引き出している。

以上により、本論文は本学大学院学則第11条第2項に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Open Journal of Nursing : 7, 1258-1273, 2017.